

# 知識探訪

## 多民族社会の横顔を読む

### シンガポールのマレー人 少数派、高まらない社会的地位

田村慶子 (北九州市立大学大学院社会システム研究科教授)

「華人とマレー人は異なる文化的価値を持つ。一般的に華人は根気強い労働者や熱心なビジネスマンになる。一方、マレー人は安易で楽しい生活に重要な価値を置く。これは、シンガポールが 1965 年に独立してから 90 年まで首相を務めたリー・クアンユーの発言である。

シンガポール人口の 14% を占めるマレー人の経済力や社会的地位は、その人口比を反映しているとは言い難い。2005 年でマレー人 (15 歳以上) の 46.4% が販売・サービス・工員職という未熟練労働に従事し、専門・技術職や行政・管理職に就いている割合は 7% でしかない。専門・技術職と行政・管理職に就く華人は 27.2%、インド人が 29.6% である。この大きな差を反映して、マレー人の平均世帯収入は華人の 66% でしかない。これはリー元首相が言うように、マレー人が安易で楽しい生活に重要な価値を置くためであろうか。

英国の植民地時代、土地所有や植民地政府職員の使用においてマレー人は優遇された。1931 年の統計によれば、マレー人の約半数は農業・漁業か、下級官吏もしくは警察官といった職業に従事していた。しかしながら、独立によって、マレー人の社会的地位は大きく変わった。シンガポール政府は独立時に憲法で先住民としてのマレー人の特別な地位を認めたが、教育費の無料以外の具体的優遇措置は認めなかった。「特定の民族を優遇するよりも、社会的上昇の機会を個人としての国民に平等・一律に与えられるべき」という理由である。建前としての平等政策の下で、マレー人は徐々にシンガポール社会の周辺に追いやられた。

その理由は、まず、政府は独立から 70 年代初頭まで「適正な比率にするため」として、マレー人を公務員や警察官にほとんど採用せず、さらにすでにその職にあったマレー人には退職や早期の引退の奨励、配置換えなど露骨な介入がなされたため、マレー人の公務員比率が激減したためである。さらに、「マレー人は特定の場合、シンガポール国民としてよりもイスラム教徒として行動する。マレーシアとの紛争が発生した場合、マレー人の忠誠心は動揺する」という理由で、マレー人は 1980 年代前半まで軍隊に徴兵されなかった。

シンガポールでは徴兵は男性国民の義務であり、ほとんどの事業所は徴兵で仕事が中断されるのを避けるために、徴兵を終えた若者を雇用する。徴兵を終えていないマレー人男性は、したがって正規の職に就くことができず、社会の周辺に追いやられた。マレー人はこのような政府の政策に不満を持ち、冒頭のような発言を繰り返す当時のリー首相に反感を強めたものの、彼の強権的統治下では声を上げることができなかったのである。

だが、1990 年に第二代首相となったゴー・チョクトンは、マレー人との対話を重視する姿勢を打ち出した。彼は、90 年に行われたマレー人知識人団体の大会に出席して、マレー人への差別、華人やインド人との大きな格差、軍隊におけるマレー人の処遇などについて率直な意見交換を行い、マレー人への積極的な支援を約束した。

このようにゴー首相、さらに第三代のリー・シェンロン首相以後は、マレー人の不満が露骨に封じ込められることはなくなったものの、優遇政策はなく、他の民族との格差は相変わらず大きい。マレー人問題は総選挙のたびに取り上げられるが、政府は以前と比べてマレー人の社会的地位が上がっていることやマレーシアのマレー人に比べて経済的に恵まれていることを挙げて、マレー人により一層の自助努力を求めただけである。

マレー人問題は、シンガポールの政治においてこれからも議論の焦点の一つとなっていくだろう。

#### < 筆者紹介 >

九州大学大学院法学研究科修了、博士 (法学)。専門は東南アジア地域研究、とくにマレーシアやシンガポールの政治、社会、ジェンダー問題を中心にフィールドワークを行っている。日本マレーシア学会 (JAMS) 運営委員、アジア政経学会理事などを務める。主要著書に、『シンガポールの国家建設』(明石書店)、『シンガポールを知るための 62 章』(編著、明石書店)、『現代アジア研究第一巻：越境』(共編著、慶應義塾大学出版会) などがある。